

M. K. Čiurlionis  
The Inner Constellation

チ  
ユ  
ル  
リ  
ヨ  
ー  
ニ  
ス  
展

内  
なる  
星  
図

2026

3 /

6 /

28 [sat]

14 [sun]

◎主催 | 国立西洋美術館、読売新聞社、国立M. K. チュルリョーニス美術館 ◎特別助成 | リトアニア共和国文化省  
◎助成 | 国立西洋美術館柴原慶一基金 ◎後援 | J-WAVE  
◎協力 | 駐日リトアニア共和国大使館、西洋美術振興財団

国立西洋美術館 東京  
上野公園  
The National Museum of Western Art

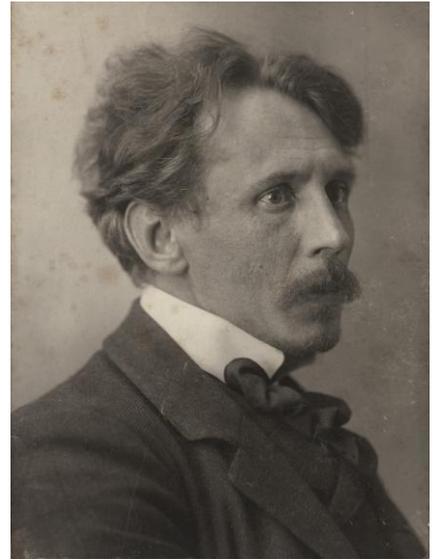


## 【開催趣旨】

このたび、2026年3月より国立西洋美術館において、「チュルリョーニス展 内なる星図」を開催いたします。

リトアニアを代表する芸術家、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス（1875-1911）は絵画と音楽というふたつの領域で類まれな才能を示し、35歳の若さで亡くなるまでのわずか6年ほどの画業で、300点以上もの作品を手がけました。世紀末のアール・ヌーヴォーや象徴主義、ジャポニスムといった国際的な芸術動向に呼応しつつも、作曲家ならではの感性と、当時ロシア帝国の支配下で民族解放運動のただなかにあったリトアニア固有のアイデンティティに根差した作品群は、唯一無二の個性を放っています。

祖国リトアニアにおける生誕150周年の祝賀ムードを引き継いで開催される本展は、国立M. K. チュルリョーニス美術館（カウナス）が所蔵する主要な絵画やグラフィック作品、約80点を紹介。日本における34年ぶりの大回顧展となります。人間の精神世界や宇宙の神秘を描いた幻想的な作品の数々のうち、今回、謎に包まれた最大の代表作《レックス（王）》が日本で初めて展示されます。また、音楽形式を取り入れた連作や、自身の手になる楽譜、展示室に流れる旋律をとおして、優れた作曲家でもあった画家のみずみずしく、繊細な感性を体感していただける貴重な機会です。2000年以降、オルセー美術館（パリ）をはじめヨーロッパ各地で展覧会が開催されるなど再評価の機運が高まるチュルリョーニスの世界をぜひご堪能ください。



リトアニア民謡「走れ、刈り上げの列よ」  
のためのヴィネット 1909年 インク/紙



## 【見どころ】

### 1 再評価の機運が高まるリトアニアの国民的芸術家。34年ぶりの大回顧展。

祖国リトアニアにおける生誕150年記念イベントの一環として開催される本展は、日本では34年ぶりの大回顧展となります。オルセー美術館（パリ）をはじめヨーロッパ各地で展覧会が開催されるなど、近年、国際的評価が高まる芸術家チュルリョーニスをご紹介します。

### 2 日本ではめったに見られない作品がリトアニアから来日！

現存するチュルリョーニス作品の大部分を所蔵する国立 M. K. チュルリョーニス美術館（カウナス）の全面協力のもと、厳選したおよそ80点が来日します。

「ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情」展（2008年）など、日本では一般にあまり馴染みのない優れた作家をいち早く紹介してきた国立西洋美術館ならではの展覧会です。西洋美術の多彩で奥深い魅力をお楽しみください。

### 3 音楽の構造を絵画に取り入れた、作曲家ならではの作品にも注目。

チュルリョーニスが絵画制作に取り組んだ期間は約6年間と、決して長くありませんが、今日その評価を確固たるものになっているのは、ソナタ形式の絵画連作などに見られる音楽様式の導入です。

同時代の画家たちとは異なり、作曲家ならではの独特なアプローチで絵画と音楽の融合を試みました。

本展会場では彼の音楽も流し、優れた作曲家でもあった画家の繊細な感性を眼と耳で体感いただけます。

### 4 謎に包まれた傑作《レックス（王）》、日本初公開！

チュルリョーニスは祖国リトアニアの民話などの民俗文化を着想源とする一方で、神智学や天文学など、当時の国際的な思想潮流にも関心を寄せていました。

本展では、人間の精神世界や宇宙の神秘を描いた幻想的な作品の数々から、チュルリョーニスの作品で唯一1メートルを超える大作《レックス（王）》が日本で初めて展示されます。

## 【展示構成】

### プロローグ

1875年9月22日、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニスは、リトアニア南部の町で慎ましい家庭に生まれた。オルガン奏者の父をもち、音楽が身近な環境で育ったチュルリョーニスは、幼少の頃から音楽の才能を示し、1894年初め、18歳の時に作曲を学ぶためポーランドのワルシャワ音楽院に入学する。1901年までワルシャワに住み、交響詩《森にて》をはじめとする音楽作品を制作する傍ら、アマチュア画家として絵を描くこともあった。さらにライプツィヒの音楽院で学んだのち、チュルリョーニスが長年の夢であった絵画の道を本格的に志すのは、1902年頃のことである。

1904年の春、28歳の時には、新たに開校したワルシャワ美術学校に入学する。チュルリョーニスの初期の絵画作品には、象徴主義的な気分の色濃く漂うものが多い。その大部分が失われ現存しないが、1904年に制作された《森の囁き》では、彼の絵画を特徴づける音楽性がすでにみとめられる。それから約6年間の短い画業のなかで、情熱に突き動かされるかのように、300点以上もの作品が手掛けられることになる。



森の囁き

1904年 油彩/カンヴァス

現存する数少ない初期作品のひとつ。神秘的な暗い森の幹の上に、霧のようにかすんだ手が浮かびあがる。ここでは、木立の形態に豎琴の弦が、森のやわらかなざわめきに豎琴をつま弾く音色が重ね合わされている。視覚的なものと聴覚的なものの融合というこのテーマは、のちのチュルリョーニスの作品においてより深く追求されることになる。

## 第1章 | 自然のリズム

「弟よ、僕たちの故郷がどれほど素晴らしいか、君が知っていたなら。そこには誰にも乱せない完全な調和が満ちていて、皆がまるで美しい和音のように共に生きている——古びた家、果実をたわわに実らせた木々、草原の眺め、ネズの木が茂る丘と森、そしてその向こうに日ごと沈む夕陽。」

(1908年9月7日、弟ポヴィラスへの手紙より)

1907年にリトアニアの首都ヴィリニウスに移り住むまではワルシャワに生活の拠点を置きながらも、チュルリョーニスにとって、祖国の豊かな自然はつねに創造の源であり続けた。また、1905年のコーカサス地方への旅で出会った壮大な山々の光景は、自然の力に眼を開く契機となった。だが、チュルリョーニスの作品においては、写実的ないし地誌的な風景描写はごくわずかな例外を除き存在しない。そこではむしろ、自然の生命感が抽象的にとらえられ、抒情的な気分や象徴的な意味を吹き込まれている。自然のモチーフはしばしば擬人的な形態で表わされ、時には画材が生み出す偶発的なイメージを利用することもあった。チュルリョーニスがとくに関心を寄せたのが、自然の動的な移ろいと循環のプロセスである。そうした自然のリズムにたいする関心は、《春》や《冬》といった連作に結実し、後者においてはほとんど幾何学的な抽象表現にまで接近している。



日本初公開 / 春 1907年  
テンペラ/紙



IV



V



VIII

連作「冬」よりIV,V,VIII 1907年 テンペラ/紙

冬の自然を主題とする8点の絵画からなる連作。静謐でメランコリックな雪景色から激しい吹雪、氷の冷やかさにいたるまで、その諸相をダイナミズムとともに描き出した。全体を貫くモチーフは樹木である。それは生命の象徴であり、連作を通じて様々な姿で変奏される。なかには2本の木に生と死の対比をうかがえる1点もある。これら象徴的モチーフは、連作の最後の1点において、幾何学的な星と矩形の集積へと還元され、純粹に神秘的な光となって観るものを瞑想にいざなう。

連作「閃光」よりIII 1906年 テンペラ/紙

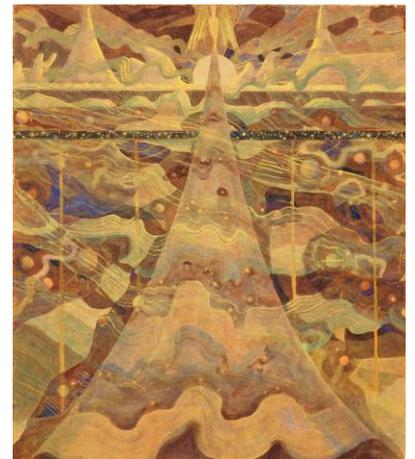
火花のような光の群れが宙に浮遊し、風に乗って流されていく。そのあいまからは黒ずんだ青い門が見え、門の中には奇妙な姿の人物らしきものが立つ。門はチュルリョーニスにおいてしばしば、精神的次元への入口、あるいは魂の通過点を象徴し、光は精神の光として解釈される。とすれば、閃光、すなわち精神の欠片たちは、混沌とした風に導かれ、門を介して何らかの変容を経ようとしているのであろう。



## 第2章 | 交響する絵画

絵画と音楽の融合は、チュルリョーニスが近代美術史上で到達した、最も独創的な位置を占めている。現存する初期作品のうちにはすでにこのテーマを扱い、音楽的なタイトルをもつものもあるが、彼が最も集中的かつ体系的にこの課題に取り組むのは、1907年から1909年にかけてである。19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパでは、ボードレー、ワーグナー、ニーチェらの思想から影響を受け、多くの画家が絵画と音楽の融合をめざした。だが、同時代の画家たちとは異なり、チュルリョーニスは、色彩による共感覚的表現にはほとんど関心を払わなかった。むしろ彼は、音楽の構造を絵画の構造に応用しようと試みた。彼によれば、「音楽はみずから固有な構造をもち、そして絵画も音楽のように構造をもちうる」。

そうした試みは、「フーガ」そして「ソナタ」連作といった作品群に結実する。連作という絵画形式によって、チュルリョーニスは、空間芸術である絵画に時間の流れを導入したのである。これらの作品では、伝統的な遠近法にもとづく統一的空间は放棄されている。画面は水平に分節された複数の独立した層からなり、各層（声部）が音楽における対位法さながらに共鳴することで、重層的な空間を形成しつつ、ポリフォニー的な響きの印象を生んでいる。このようにして、チュルリョーニスの絵画は20世紀の抽象絵画の成立に先立ち、自律性を獲得したのである。



第6ソナタ（星のソナタ）：アレグロ  
1908年 テンペラ/紙

### 日本初公開

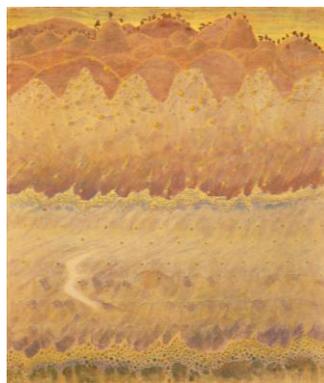
二部作「プレリュード、フーガ」よりフーガ  
1908年 テンペラ/紙

幻想的な湖畔のモミの木の風景だが、奇妙なことに、実在するはずのモミの木の像と水面の反映像は対応していない。本作の構造は、音楽におけるフーガの構造、すなわち「模倣」と「展開」そして「転回」に則っている。フーガでは、複数の独立した声部が同じ主題を模倣し、変化しつつ追いかける。ここでの主題は、モミの木と、有機的な曲線からなる面である。これらの要素は左から右へと複雑に絡まり合いながら進行し、徐々に大きくなり、やがてまばらになることで、静かだが劇的な音楽性を喚起する。



第5ソナタ（海のソナタ）  
1908年 テンペラ/紙

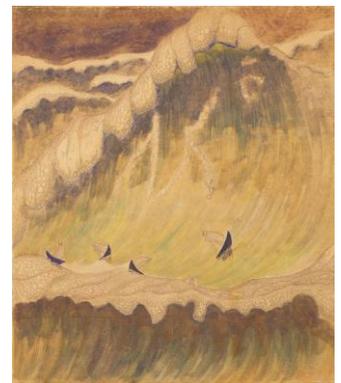
チュルリョーニスによる「ソナタ」連作は全部で7作が知られる。各連作は音楽におけるソナタと同様に、通常、3つないし4つの楽章からなる。本作では、まず、軽快に泡立つ波が岸辺の丘へと姿を変え（アレグロ）、ゆったりとしたテンポで海底に変わり（アンダンテ）、立ち上がる大波によって劇的に閉じられる（フィナーレ）。アンダンテには、海底の王国にまつわるリトアニア神話のイメージが重ねられているのだろう。フィナーレの図像は、葛飾北斎の《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》から影響を受けたという指摘もある。



アレグロ



アンダンテ



フィナーレ

## 第3章 | リトアニアに捧げるファンタジー

「リトアニア運動について聞いているかい？ 僕は、過去も未来も含めたすべての作品をリトアニアに捧げる覚悟だ。」

(1906年1月7日、弟ボヴィラスへの手紙より)

18世紀末以来、リトアニアはロシア帝国の支配下であり、厳しい抑圧を受けていた。だが、1904年の日露戦争でのロシアの敗戦と翌年のロシア革命を受け、リトアニアにおいて民族解放の機運が急速に高まるにつれ、チュルリョーニスもまたこの運動に積極的に身を投じていく。彼はリトアニア美術展を組織した最初のメンバーとなった。失われた国民／国家のアイデンティティを取り戻すために人々の拠り所となりえたのが、芸術にほかならなかったのである。チュルリョーニスは、リトアニアの地方に息づく民話や民謡、民芸といった民衆文化の再評価こそがリトアニア的な芸術様式の構築に不可欠であると考え、しばしばそれを自身の作品の着想源とした。リトアニアの伝統的な十字架は、民族復興の象徴的なモチーフのひとつである。一方で彼は、この時代を代表する精神主義的な運動である神智学や、カミーユ・フラマリオンの天文学をはじめ、国際的な思想潮流にもけっして無関心ではなかった。《祭壇》や《レックス（王）》といった、人間の精神世界や宇宙の神秘をめぐる深い思索に満ちた作品の数々は、一民族の枠組みを超えた普遍的な性格を帯びている。



おとぎ話 (王たちのおとぎ話)

1909年 テンペラ/カンヴァス

### 日本初公開



祭壇 1909年 テンペラ/厚紙

階段状の巨大な祭壇の側面に、下から上へ展開する物語が描かれている。登場するのは、騎士や天使など、いずれもチュルリョーニスにとってなじみのモチーフで、独自の象徴的な世界が広がっている。同時に、階段というモチーフそれ自体も、高みへと上昇する人間の精神の諸段階を象徴している。この階段の数は、宇宙と人間の構造を7つの階層に分ける神智学の理論におそらく対応している。それによれば、人間性の聖なる領域は第4の段階から始まる。《祭壇》の3段階目を占める闘争の物語は、4段階目にして完結し静けさを獲得するのである。頂上から立ち昇る聖なる煙は、背景の海に点々と浮かぶ船から上る俗なる煙と相似関係をなし、精神的なものであるにちがいない本作の主題が、日常的な人間生活の営みとも地続きにあることを示唆している。



祭壇の3段階目



海に浮かぶ船



プレリュード（騎士のプレリュード）

1909年 テンペラ/紙

本作の主題である「ヴィティス」、すなわち騎士のモチーフは、14世紀から18世紀末までリトアニア大公国の国章として親しまれた、国家の独立と栄光の象徴である。チュルリョーニスが描く都市は、ほとんどの場合、特定の景観を表わしたものではなく、彼の想像の産物である。ただしここでは、丘陵の起伏や斜面、崖などに、どこことなく画家の愛した首都ヴィリニユスの風景を思わせるところがある。その上を勢いよく飛翔するヴィティスは、リトアニア民族の復興を高らかに告げるかのような。

### 三部作「ライガルダス谷」

1907年 テンペラ/紙

本作に描かれるのは、チュルリョーニスの故郷ドルスキニンカイ近くの谷間の風景である。伝説によれば、かつてこの谷にはライガルダスという美しい町が存在したが、その繁栄にともない、人々は高慢になっていった。そのことが神の怒りに触れ、ある日突然、ライガルダスは地中深くに沈められてしまう。いまもこの地では、静かな夜に、かつての住民たちが助けを乞う叫びが聴こえるという。地の底に眠る町の記憶が、この一見何の変哲もないどかな風景に、悲哀にみちた詩情を与えている。



### リトアニアの墓地

1909年 テンペラ/厚紙

リトアニアの十字架は、自然崇拜や祖霊信仰の伝統とキリスト教の象徴が融合して生まれた、同国を代表する文化である。ロシアによる同化政策のもと伝統的な十字架制作は禁止されるが、チュルリョーニスの時代、かえってそれは、民衆の独立への願いを込めた「静かな抵抗」の象徴としてひそかに広まっていった。本作はジェマイティヤ地方の十字架に取材したものではあるが、特定の地誌的な風景というよりも、リトアニアの大地に根ざす民族的な記憶と祈りの場としての精神的な風景をかたちづけているというべきだろう。その行方を導くかのように、十字架の上には、魂の道標である北斗七星が輝いている。



リトアニアの十字架

©Laimonas Ciūnys



1908年以降、チュルリョーニスは画家としてのさらなる飛躍と成功を求め、ロシアのサンクトペテルブルクを訪れるようになる。チュルリョーニス最大の作品である《レックス（王）》は1909年のサンクトペテルブルク滞在中に描かれた。当時のロシア芸術界の重鎮であったアレクサンドル・ベヌアは、この作品についてこう述べている。

「その途方もない魅力と真のメッセージは、優しくも哀しく、にもかかわらず甘ったるさなど微塵もない特異な配色にある。律動的に輪をなす天体の円環にある。地球の切なげな丸みを覆い、光輝く草原のように広がる曙が織りなす神秘的な魅力にある。[...] ここにこそ芸術の真髄がある。」

しかし、チュルリョーニスはこうした好意的な評価を知ることはなく、伴わない名声に失望し、傷つきやすい精神は憂鬱に苛まれていった。ミュンヘンで開かれる「青騎士」の展覧会への招待がカンディンスキーから彼のもとへ届いた時には、遅すぎた。1910年の暮れには、チュルリョーニスは重い病の床に伏していた。翌年にはワルシャワ近郊のサナトリウムに入院し、一時は回復するものの、肺炎を患い、4月10日に35歳の生涯を閉じた。



### 日本初公開

レックス（王）

1909年 テンペラ/カンヴァス

大きなカンヴァス画を展覧会に出品すべく手掛けられた、チュルリョーニス最大の野心作。

世界をつかさどる超越的存在としての「王」は、チュルリョーニスが初期から一貫して取り組んだ主題のひとつである。画面中央の玉座に座す透明な王の姿が巨大な塔のようにそびえ立ち、星や天使、木々といった水平に反復するモチーフと交差することで、重層的で建築的ともいえる空間を生み出している。

ここでは、王は単なる世界の支配者ではなく、すべてを内包する存在であり、壮大な交響詩的印象のうちに自然や宇宙の力と一体になっている。

## 【開催概要】

展覧会名	和   チュルリョーニス展 内なる星図 英   M. K. Čiurlionis: The Inner Constellation
会場	国立西洋美術館 〒110-0007 東京都台東区上野公園 7 番 7 号 国立西洋美術館 企画展示室 B2F
会期	2026 年 3 月 28 日[土] - 6 月 14 日[日] ※巡回予定無
開館時間	9:30~17:30 (毎週金・土曜日は 20:00 まで) ※入館は閉館の 30 分前まで
休館日	月曜日、5 月 7 日 [木] (ただし、3 月 30 日 [月]、5 月 4 日 [月・祝] は開館)
観覧料 (税込)	一般 2,200 円、大学生 1,300 円、高校生 1,000 円 ※中学生以下無料、障害者手帳をお持ちの方とその付添者 (1 名) は無料 (それぞれ学生証等年齢の確認できるもの、障害者手帳をご提示ください)。 ※国立美術館キャンパスメンバーズ加盟校の学生・教職員は、学生証・職員証の提示により本展を学生 1,100 円、教職員 2,000 円でご鑑賞いただけます。 ※観覧当日に限り本展の観覧券で同時開催の「北斎 富嶽三十六景 井内コレクションより」、常設展もご覧いただけます。 ※チケット販売場所等詳細は公式サイトをご確認ください。
主催	国立西洋美術館、読売新聞社、国立 M. K. チュルリョーニス美術館
特別助成	リトアニア共和国文化省
助成	国立西洋美術館柴原慶一基金
後援	J-WAVE
協力	駐日リトアニア共和国大使館、西洋美術振興財団
公式サイト	<a href="https://2026ciurlionis.nmwa.go.jp">https://2026ciurlionis.nmwa.go.jp</a>
お問い合わせ	050-5541-8600 (ハローダイヤル)
国立西洋美術館公式サイト	<a href="https://www.nmwa.go.jp/">https://www.nmwa.go.jp/</a>
国立西洋美術館 SNS	X   @NMWATokyo Facebook   @NationalMuseumofWesternArt Instagram   @NMWATokyo YouTube   @NMWATokyo



報道関係の  
お問い合わせ

「チュルリョーニス展」広報事務局  
(ユース・プランニング センター内)  
担当：大山・片山・池袋  
TEL: 03-6821-8229 FAX: 03-6821-8869  
E-mail: 2026ciurlionis@ypcpr.com

広報画像

以下の URL/二次元コードよりダウンロードいただけます。

\* 初回のみユーザー登録が必要  
<https://service.press-camp.jp/pcamp/event/635>

